

斎藤茂について

——研成義塾の人びと(二)——

宮 沢 正 典

目 次

はじめに

- 一 人格形成における研成義塾
 - 二 雑誌『山上』の創刊
 - 三 世界大戦と戦後処理への視点
 - 四 白樺派批判
 - 五 庶民大学を起すの議
- 結びにかえて

はじめに

斎藤茂をもって研成義塾出身の典型と決めることはできないが、かれこそ研成義塾の生み出した人でなければならぬ。井口喜源治と研成義塾がめざした趣意を、もっともよく受教しかつ独自の光源となった出群の一人であるにちがいないからである。

かつてかれについて論及されたことは、きわめて稀であるが、信濃毎日新聞社を辞して名古屋に於つた悠々桐生政次が、三〇歳に達しない斎藤青年を賞揚している文章がある。悠々は、ビョルンソンのアルネが北歐の高山からほるかに浮世の幸をあこがれてうたった歌を冠して、斎藤を信濃のアルネと呼んだ。かならずしも周知ではない斎藤茂像の一斑の紹介をかねて、はじめに引用しておきたい。

「(前略) あはれ、わが懐しき信濃の青年にアルネと同一の理想に憧憬しつゝあるもの、果して幾人あるぞ。

然り、私は疾くより信濃の一アルネを知つて居る。彼は私に書を寄せる毎に、その書のいづれかの部分に、必ずや彼が理想を追求しつゝあるの煩悶や気分や焦慮をうたつて居ないことはない。彼は農家の一青年に過ぎぬ。しかも彼のその心は郷土に土着せずして、東京に、倫敦に、巴里に、伯林に、到る処に逍遙して居る。彼は鋏を取るの余暇にシヨールを読み、メーテルリンクを誦し、イブセンを究めた。そして彼はツエッペリンの威力がいかに倫敦市民の心胆を寒からしめたかを見て、飛行船に関する書籍をも読破せざるをえなかつた。

こうした青年は古来得て生意気となり、浮薄に流れるものであるが、しかも彼の健全にして熱烈なる情操は、ややもすれば陥らんとする廢頽の境より彼を救ひ出して、よく日常の業務に励み、人類として、また農夫の子として、尽すべき義務を尽さしめて居る。かくして彼は日に増し内心に充実する力の強きことを自覚し、何事をか為さずんば止まない向上心に燃えつつある。

私は彼より彼の物質的並びに精神的生活の消息を得る毎に、私の境遇を憫れんで、彼の境遇を羨まないことはない。彼は家豊かと云ふではなからうが、なほ恒産に伴ふ恒心を有し、その余裕を利用して、孜孜として勉勵怠らない。これを私の恒産恒心共になきの生活と、目より直ちに筆に移るの新聞記者生活に比すれば、ほとんど天地霄壤の差である。それ故私は彼に書を返す度毎に、必ず彼を励まし、彼をして他日の大成を期せしむべく、熱心に彼を指導せんことを勉めて居る。

これを要するに、私が信濃に於てかうした若い一人の友を有して居ることは、私自身の生活に於て実に誇るべき一大光榮である。

その結果として、私は信濃のこの「アルネ」がその『高き山より』二十余年來恋ひ通したる『浮世』に飛翔し去らんことを熱望せざるを得ない。(中略)彼は自然を楽んでその中に真理と愉悦とを見出すであらうか。又は人類の奮闘を希求して、その中に同一の真理と愉悦とを見出すであらうか。いづれにするも私は彼をして全からしめたい。彼の運命は私にとって一つのスフィンクスである。⁽¹⁾

いささか文学的であるが、よく齋藤の性格を把握し、その成長をあたたく見守っているのがうかがえる。「郷土に土着せざるその心」や「健全にして熱烈なる情操」は齋藤自身の資性にもよるが、その形成はすぐれて研成義塾時代の生活と無縁ではない、とわたしは考える。

本稿では、最初にかれの人格形成における研成義塾の役割について、次いで、主として第一次世界大戦前後における青壮年期の思想の特徴について、かれの文筆活動を通して考察してみたい。

(1) 悠々生「高き山より」『信濃毎日新聞』一九二六年三月一九日。これを齋藤は、雑誌『山上』創刊号(一九二〇年二月)に、悠々の快話をえて載せている(齋藤『わが日わが道・前篇』一九六六年、山上社刊にも所収。なお、同書は以後それぞれ『前篇』『中篇』『後篇』『拾遺篇』とのみ略記する)。

一 人格形成における研成義塾

斎藤茂は、秀次郎、ち、ょうの三男として、一八八七（明治二〇）年三月一〇日、長野県南安曇郡烏川村扇町（現在は堀金村烏川）の農家に生れた。しかし、二人の兄はいずれも幼齢で逝ったから、かれは事実上唯一の嗣子として成長した。このことは茂の生き方を強く拘束することになる。両親の寵愛を一身に受けながら、同時に農家の後継ぎとしての枷を逃れることができなかったからである。

秀次郎は、その青年時代には漢学者用拙武居彪に師事し、嚴格で律氣一方の人物であり、茂にもそれを強いた。茂は、「高等小学三四年生徒のころ、学校のかたわら漢学塾に通い」、⁽¹⁾研成義塾に入ってから、「その休暇をもって膝許で嚴格に百姓の手仕事を仕込まれた。朝は夙く夕べは晩かった。冬の夜は父の夜業——縄ないと草鞋つくり——の炉辺で、その前に固く坐って『史記』など読まされた。読みちがえては尖った声で怒られた」。そして「二十歳——徴兵検査期——を越すまで私に加えるための鞭が父の手から放された例がなく」、それらの「躰はすべて嚴格が過ぎて苛酷」⁽²⁾なほどであった、と懐述している。⁽³⁾

茂が、研成義塾に入ったのは、積極的理由があつたことではなかつた。「父一個の考えによつて私は中学校に入られなかつた」⁽²⁾いわばその代償として、手近の義塾が選ばれたにすぎない。なぜなら、「中学校へ行けば、順々に上の学校にのぼり、仕舞いには家を継がなくなると云つて、息子の進学心を押えて、隣り村の寺小屋風ののこる私塾に入れ」⁽³⁾たのであつて、そこがキリスト教主義に立っていたことは、秀次郎にとってむしろ不本意であつたにちがいない。

斎藤が研成義塾に在籍したのは、井口喜源治の『備忘録・第一』によれば、一九〇一（明治三四）年、一九〇二年および中断後の一九〇六年度である。年齢は一四〇五と一九歳にあたる。斎藤によれば、「一四五才のころ、自分は山麗の家から一里半ほどくだつて小さな町の私塾に独りぼっちの徒歩通学を続けていたが」、途中「村へはいると道祖神の前

をふさいでいる小学生がわざと路をあけて通らせておいて、あとから雪礫とともに『ミノ、クソ、ヤソ』となにやらわからぬののしりを後ろからやたらとあびせ」られたりした、と述べられている。⁽⁵⁾ 通学だけではなく、太田喜代松と「塾の寮の勝手元の板の間で半年も自炊生活を共にした」こともあった。⁽⁶⁾

以下、「世の迫害に辛うじて立った小さな耶蘇塾に学んだ者の心には一種抜くべからざる力が植えつけられた」とする斎藤の、その時期について記した文章を拾いながら、かれが義塾からえたものを探ってみる。

その一は、井口のもっていた信仰である。「私は田舎の若者のことで哲学や宗教について一向知識を持たなかったが、たゞ小学校上りの頃、ある私塾に通つて、その塾の先生が熱心なキリスト者であった関係から、宗教の教義の事は何も知らず、唯々先生の人格の感化から、謂わば直入的に主キリストを信ずるようにはなっていた。私はいつも自分の持つ信仰を喜ばしいものとして」⁽⁸⁾抱いていた。そして、心友にも勧めて信仰を説いた。その友から、「井ノ哲先生や樗牛や天溪などの論説」を引いて、八方塞がりのキリスト教の運命の心細さを指摘されても、斎藤は、「……キリスト教が亡びるといふことはただ世界中が不信仰になつたという状態に過ぎぬ」と反論して、キリスト教信仰を擁護している。⁽⁹⁾

井口は一面文学的で、その面からの感化も無視できない。塾生のあいだでも文芸、美術を愛好するものが多かった。その二は、井口と塾友らとの接触によるこうした開眼である。「基督教主義の塾に居た関係もあつて、十五六歳で人生問題に気を惹かれ、ブラウニングだ、ウォーヅォースだ、ロングフェローだ、エマーソンだと英米の詩文をよろこび、ひたすら理想の高きを趁うて、俗事の卑きを悪魔のごとく賤しみ疾んだ」⁽¹⁰⁾。こうした延長線上において、独特の勤労観も形成されたし、独学でドイツ語をマスターさせてもいるとみることができ。

自分をはぐくんだくぬぎ林と人生とをからませて描いたかれの「くぬぎ林」中の回想は、研成義塾でえたこの二者が結合した時点での斎藤らの若者の立場をよくあらわしている。かつて「研成義塾の人びと」では、ちがった文脈で引用

したが、ここに再録する。

「（前略）わたしがこの水溜のあたりを独りで自由にさまよひ『愛吟』や『天地有情』を声高に放吟して憚からぬ年頃になったのは、それから三、四年してから、耶蘇の学校の教育を受けた後で、時は日露戦争の勃発する直前、主戦論と非戦論が国論を真ツ二つに割った激動期、まさに日本のスツルム・ウント・ドラング時代、わたしは受けた教育の思想的傾向から、自分の精神は非常に感激と勇氣に燃焼して、悲壮なほどの献身的宗教心に充たされた。そのため二、三の同志と謀り、世俗に対する挑戦として雑誌『天籟』を発行した。初心ながらルーテルの意気に倣ひ、そのプロテスタント精神を結んだのは、外ならぬこの水溜のほとりの草場であった。（中略）此処にわれらが常に教へを蒙る先生の導きにより、わが同人がその他の友人先輩と合せて十人、二十歳未満の連中が時勢に魁けてかのラウンド・ヘッドのピューリタン精神を移して精神的廢類の彼の地同胞の間に神の国を建てるといふ大望（野心）を抱き、出稼移民の卑しい名の下にも大挙、北米の加洲に渡ることなり（後略）」

と高揚した彼らの清教徒的心情が披瀝され、その具体化が試みられている。

しかし、齋藤にはそのいづれをも直進することは許されず、一旦挫折したようである。直接的には、中学進学をも阻んだ後継ぎの問題から、渡米組から「ひとり残されたわたしは、桜炭にたとへられる信仰の、はなればなれとなつてはその火と熱を失」うことになつた、といつてゐるように、盟約を結んだ多くの同輩をアメリカに放出した時点で、一種の虚脱を経験したのであろう。さらには、「私自身も実は根底の浅い逸り気の面もあつて、やがて確信を欠きました」ことも原因する。

もつともこれらの敘述は、いづれも後年、間隔を置いてなされており、一定の余裕がうかがえるのであるが、その渦中では、自分を悪魔の巨魁なりとして激した調子で慷慨していた。

「余が拾九年の生涯は知る人ぞ知らん、されど之表面也、皮相也、内心に至りては殆んど諸子をして悚然たらしむ

るもの也、されど諸子に目を瞑らんことを望まず、敢て目を刮ひ燭を切らんことを願ふ而して憤つて来り余を手裂にせよ、肉を啖へよ、血を啜れよ

明治三十八年一月廿一日若し余を自宅に訪ひしものあらば右手に酒瓶を握り左手に盃を捧げ持つたる一箇怪奇の狂漢を見しならん、之れ余也、疑ふ勿れ之余也

余は十三四才の交より文学に興味を持ちたりき十六七歳に及んでは之を職業となさんとあく迄虫のよき考を出せり 元来好みし農夫の生涯も之に向つて一瞥の値だにあらざりき 然れどももろくも両親によりて拒絶されたり嗣子なる故と学費なき故とに於て(註二人の兄は甚だ幼くして夭し残るは我一人也)而して彼等は之を固執して余が泪をふるつて文学は余の生命也、之を取り去るに於ては死灰同然也、世に興味なく快樂なき殆んど死せると忖ふなきと極言せしにも係らず無理非道(其時しか思ひき)に家に止まらせられたり

おゝ能くも拒絶したり、能くも殺さんとしたり、さらばいかで殺さるゝを待つべきか、自ら死なん自から傷めんと禁酒を破りて之をあふれり之れ見せしめなりし也、面あてなりしなり、一種の示威運動なりしなり、併しかゝる小胆なる自暴自棄は堂々たる男子として余りに馬鹿々々しきを恥ぢて二日にして酒は止めたり、(中略) ああ一年前の余ならばかかることを云ふは赤裸にして白昼大鼓を打ちつゝ都大路を行くよりも尚恥多きことなりしならんされど余は昔の余にあらず而して些の臆面もなく多くは面識だもなき諸子の前に披瀝することを得るを光榮とする也¹⁴

プロテスタント・ブンドの崩壊は、それとともにかれの倫理的支柱をも危くした。「家もすて、父祖の家業もすて身をもすて、までと血道をあげた文学道への熱情」¹⁵の沸騰していたとき、「私はふかく父の残忍酷薄な心を怨んだ。父父たらずば子子たらずとさえ心の奥に叫んだ。激情とまた絶望によつて私はいく度か家出の決心もした」¹⁶のであった。文学も渡米も阻まれた鬱勃たるものなかく、「天籟」と平行して、投書をはじめさせている。『信濃毎日新聞』に無教会主義を主張した小文を投じて、主筆の雪鞋牛山征四郎と論議をかわしてもいる。また、一九〇六(明治三九)年以降

は、同村の黒岩島のところで初見した『文庫』を愛読し、ここに創作を投じて、入営までの二年間に六篇、その後には、『新生』『読売新聞(日曜附録)』『信濃民報』『長野新聞』『信濃毎日新聞』などえ創作、随想、評論などを寄せはじめている。これらの作品には、はやくも一種諦観めいたものがうかがわれる。『天籟』の方は、「火と熱を失つて」から情性的に継続されたが、一九〇七年二月陸軍現役兵に徴集されて終熄した。

この服役は、他の面においても転機になったとみられる。新発田歩兵第一六連隊における体験にもとづく創作「雪あけ」のなかにも徴候はある。作中の父は、入営の前夜、涙をもって「息子にひと言も云わずに秘かに繕った先年の聖書を捧げ持ち、『俺は耶穌になったのではない』と、はつきり断つて、之をあらためて門出の贖として息子に贈」る。息の「眼から涙がさんと流れ落ち」る。激情が去ったあとの父との和解、父の人格の再発見への契機となっていたであろうことである。こうした父との格闘を通して人格形成をなしていった。

別の文で、「二十歳を越してから、私に父がわかり出して来た。三十になつてから、一そうそれがわかつて来た。いま四十歳にならんとして父を亡なつてから、つらつら想う時、ようやく父が高い人格の所有者であつたことを知ることが出来る。彼れはいつまでも私の恩恵ある教師、私の親切なる批判者であるべきであつた。父あつてその指導により、その啓発をうけて進展することも出来た私の生活は、今後よく中正を失うことなく行けるであらうか」と追孝している。

初年兵時代の日曜下宿には、書物や自分の雅号を刷り込んだ原稿用紙をおいて、それに向うのを楽しみにしていた。結果的にみて、十代の雑介的な部分を燃焼させて、いわばディレクタント的な慰藉としての文学に変形させていきつつあったといえる。在役中にあたる期間にも数篇を発表している。

第一期検閲後、一九〇八年四月、日露戦争後の韓国守備のために咸鏡南道に赴く。幾人かの戦友の死も自分を見つめさせることになつたらしい。この間に歩兵第五〇連隊が郷里に近い松本に設置されて、十か月でこの新衛戍地に凱旋す

る。三年間の軍隊生活もたらしたもうひとつは、「スパルタ精神に鍛えられ、神靈上には兎も角、いま思つてそれが自分の勤労生活の根幹の一部とはなつた」⁽¹⁸⁾ことである。

軍隊から帰ったときには、「青年期の過誤」を自覚しており、文学と農業とを、次のように結びつけて、自分の道として自負できるようになつていた。

「僕は文学をやるにしても、生一本の百姓が身上たることの信念に動揺はさせない。筆をとる人の尻にくつつきたくない。どこまでも文学芸術を愛好する一農夫として始終しようと念願する。しかして、その愛好するの度は決して職業人のその後ろに落ちるものでない自信をもつていく。農夫のよろこばしいところは其処だ、自由だ、活達だ、肉体の自由とともに精神の自由、肉体の健康とともに精神の健康、天空翔るその放奔意欲、ある時はロマンチックの憧憬に駆られよう、ある時はデカダンの欲念を恣にしよう。名のなき百姓のことだ。誰を煩わそう、誰の碍げとなろう。天上天下唯我独尊か、これで僕は剛胆に眞の芸術家として自己を許していく」⁽¹⁹⁾

ここに見るかぎり、文学も農業も、斎藤自身のものとして自律的に統合されており、同時にそれ自体が独立の価値を保有する。すでにかれは、『天籟』において、農夫の労働を愛することをいくたびか語っている。⁽²⁰⁾そこでは、朴訥な農夫からではなくて、似而非なる労働者、志をえなかつたもの、不遇をかこつもの、才力のないものなどのいう遁辞としての「労働の神聖」が高声されることを、「己が神聖なる領域」を侵されることとしていたのであるが、その時点で、かえつてかれが批判しているこれらの諸類型のどれかに、自らの姿を見出していつていたのではないか、と思われぬ節がある。右の自負が本領となるのは大正期に入つてからである。

農民の生き方についての、次のような開陳は、かれの実際の生き方からみて、けつして虚言ではなくなつてゐる。百姓に疾苦があるなら、それが百姓の報酬ではないのかと問い、「疾苦を疾苦とせぬところに農人の眞骨頂は存する」といい、百姓の生活は、「与えられるとも知らず、奪われるとも知らず、景氣も知らず、不景氣も知らず、苦とも知ら

ず、楽とも知らず、誠実に働き、忠実に務めて倦まない」ともいう。そして、こうした境地に導き入れる自覚と、そこからくる信念とが、農民の求めて止まぬものであると主張するのである。⁽²¹⁾ 農業自体の独立した価値の発見にこそ意味があるというのであろう。だから、世をあげて文明を追うに急なのならば、農民だけでも野蠻にとどまり、文明に反逆することが使命なのではないか。文明も農村の疲弊も、農業の独立の価値を崩すものではない。むしろ、それらは眞の百姓をふるう篩であつて、そのあとにこそ、「眞に義務の觀念によつて働き、それを樂しむとし、満足とする百姓どもが残るであらう」と見通している。いわば敗残の、「妙味ある生活の道に就くを知らず、とり残された氣力なき死んだ百姓」——その百姓によつてわが国の農業の立つてゆく将来のあるのを信じ、それを期待⁽²²⁾する。これらに反して、農民と農業を荒廢させるものがあるとすれば、「それは物質的報酬の觀念が農人の頭腦を完全に占領した時⁽²³⁾」であると結んでいる。

一種の農本主義的思考であるが、しかし、それは財政經濟の根本たる農業であるとか、まして農業立國論などに及ぶものではない。農業を、ではなく、そこに見出すべき精神の優越を説いているのである。かれが農業にこのような独立の価値観をおく基礎は、カルビニズムの召命觀に似たものがあるように思える。「田園讒語」は、一九歳のときのものであるが、そこには、労働、金銭、職業、貴賤などについて、プリミティブな形におけるカルビニズムを読みとることが出来る。そしてかれは、その農業を主体としてえらんだのであつた。

除隊後に表明された前記のマニフェストは、もはや一時的な感興によるものではなくて、斎藤の生涯を貫く指針となるものであつたといえる。

夏から冬にかけての斎藤の生活例の一部を、年次は前後するけれども、ここに復元してみる。

「閑寂の地に暫し世と離絶して、悠然読書三昧の境に遊ぶことは、絶好の銷夏法たること素よりながら、しかし塵垢に処して常平忙しく業務に従うこと、殊に絶え間なく劇しい労働に服することも亦所謂銷夏法中実効すぐれたるも

のなるを失わない。

私共農業労働者にとっては特に然りで、百姓が夏の苦しさを知らないのは、夏が百姓にあって一年中一ばん劇しい労働季節だからである。夏を夏と覚え、暑を暑と感ぜず、秋風たちまち驟るを見て、早くも夏の過ぎたるに駭く。それは慣習の馴致か、修練の成果か、自から識らず、ただ愛すべく親しむべき夏を知るのみ。」

こうしてできた秋繭を、烈日のなか一里の道を日に五貫七貫づつ、町の繭糸会社へ売りにいく。⁽²³⁾

「書齋と呼ぶには甚だ憚る私の部屋——書物を読んだり、物を書いたり、主に私一人の仕事に使う八畳の——部屋の南口の障子が日射しを受けるようになった。ひる過ぎになると二本の障子の下の方が半分ほどもあかあかと陽を受けて、戸口に近い畳がその余熱で暖まる。

晩い秋蚕を片づけた日の午後、ほとんど一月ぶりでこの部屋にはいつて、毎日野外に働きのながらも気づかずになっていた秋の日の深さを比処に見出して、さすがに驚いた。思えば九月もはや末に近いのである。物を考えず、日を数えずに過ごして来たあわただしい日があまりに長かったことを、今更ながら心づいて、私は心の底からわき出して来る哀愁を禁めることが出来なかつた。⁽²⁴⁾」

こんなときに、「今日よりよき明日を見出すことが人生の目的である」という青年期に愛した句が想起されて、償いがたい悔恨と絶望を誘うけれども、やがては、

「この頃の夜長にまかせて私は一時二時まで物を読んだり書いたりするが習わしとなっていた。私は静かな夜を愛した。夜を愛したというより、夜に愛され、そのあたたかい懐に抱かれた。

私は夜の仕事——夜業^{よなべ}という——として、蚕上からこつち、ちよいちよいと小さな研究にかかつていた。それは人に話すほどの目新しいものではなく、又もちろん、自分に価値づけるものでもなかつたが。ただ私自身の修養の一助として試みて来たに過ぎなかつた。実は今ある哲学者の書きのこした“Zum ewigen Frieden”と題する小論文を中

心として、わずかばかり平和について学ぼうとしている。読むことの不自由な、なお解することの鈍い私に、この仕事が一向にはかどらないが、そういう仕事の中に昔の人の貴い精神にふれることの愉快と有難きに、小さいながら纏まりをつける勇氣を保って行きたいと思う。⁽²⁶⁾

カントについては、このころ『信濃教育』に「カント小考」と題して一一回連載し、それに「カントの生涯に於ける思想変化」を寄せて結んでいる。⁽²⁶⁾ おそらくこのようにして、かれはトライチケ、グロート、トロー、エマーソン、ニーチェ、プラトン、ダンテ、ルター、ルソー、ショウ……を読みすすんだのであろう。そして、東京に出たある時には、一度にナルトプの“Platos Ideenlehre” (六田五〇銭、松村書店)、イダーシャイムの“The Life and Time of Jesus The Messiah” (二卷一三田一誠堂)、マクス・ヴントの“Geschichte der Griechischen Ethik” (二卷一六田、南陽堂)、フアラアの“Life and Work of St. Paul” (二卷一田五〇銭、松村書店)を買ひ、郁文堂では、かねて関心のあったツェラーの『ギリシア哲学史』二巻は二〇円とあるのを、三回もいってみながら、結局断念して帰っている。⁽²⁷⁾ 中農としての過不足のない経済的基礎が、齋藤の生活原理を生かしているといえる。こうした水準の研究は、あくまでも「ただ私自身の修養の一助」であり、「昔の人の貴い精神にふれることの愉快」を求めたものであった。また、社会から目をおおって隠棲しているのではなく、「平和」についてのみならず、現実認識をもつちかっていた。それは、個人雑誌『山上』の時代に開花したといえる。

井口喜源治のめざした研成義塾の教育が、どういふものであったかは、すでに「研成義塾の人びと」において述べたところであるが、齋藤は、「主義による完成された自由独立の教育機関」であつて、そこには修養があつて卒業がない。「修業は社会にまで延長し、卒業は終生に及んでの人格の完成」であり、また、ここは英才、偉人の揺籃ではなく、「たゞの凡人を作る修練場である」と、規定している。それらが齋藤の義塾で体得したものである。同じ文中に、かれの描く井口のプロフィールがある。

「井口先生は見る目に古武士の風格がある。背は高くないが骨格逞しく、額ひろく、眼ひらけ、鼻隆く、一文字に結んだ口元に犯し難い威厳がある。井桁の家紋付黒木綿羽織に小倉袴のひだはよれよれでも絶えて膝をくずすことなく、挙措は端正、動作は謹直、一言一句も苟にせず、而も人に接して不断の笑みを湛え、人と語って淡々の味を失わぬ。

世間『彼は変り者』との声を聞くが、変っているのは年中の羽織袴かヤン信者か、禁酒禁煙か——それに異論はないとしても、理屈っぽくなく、^{ベンチテツク} 衛学的でなく、西洋かぶれせず、経済の話もわかり、人並の道楽も持ち、人情味も豊かだとしたら、これを云う者こそ変り者なのだ。

しかしながら、井口先生の偉大さは、その平凡に流れて平凡に流れず、世俗に泥んで世俗に墮せず、常識に富んでまたそれを越えたところにある。先生が生徒を訓えるのはむずかしい言葉でない、『よい人になれ』これだけだ。」井口を語りながら、じつは、齋藤自らの井口の理想像を語っている。そこに描かれている井口像が、齋藤の学びとったものであった。井口を尊敬し、井口もまた齋藤に厚い信頼をよせていた。両者の間の書簡もそのことをよく物語っている。しかしながら、かれの特徴は、井口を神格化して義塾を護教的に、岩のようにかためてしまっていないことである。もちろん義塾の擁護者であり、後援にやぶさかではないけれども、義塾の校友会がもし小さく求心的にこりかたまっていくとしたら、かれはそうした団体を好まなかつたであろう。もう少し精神の自由と独立の価値を知っていたし、鎌と鉈を掴みながら、もう少し洗練された知的ディレッタントとなっていた。研成義塾に対して右のような熱い思いを抱きながら、義塾やその周辺のことからについて、つねに一定の距離をおいておくことを忘れなかつたのではないだろうか。キリスト教信仰は、「やがて確信を欠きました」かもしれない。だがそれは、すでに倫理的生活原理として定着していたのである。プロテスタント・ブンドは、熱情的なものの最後のものであった。

- (1) 斎藤茂「隣の愛」『信濃教育』一九六五年八月号(『後篇』一九六七年刊に所収、一五〇ページ)。
- (2) 斎藤茂「父の顔」『信濃教育』一九二四年七月号(『前篇』一四一ページ)。
- (3) 斎藤茂「雪あけ」『長野新聞』一九二二年三月連載(『前篇』一七八ページ)。なお、これは創作ではあるが、主人公村山久吾は斎藤茂にはかならない。中学校「云々は事実とみていい。作中の父は、久吾の隠し持っていた聖書を取りあげて、目前で真ッつに引裂いて、将来の見せしめにしたほどの耶蘇嫌いであった。この作品と斎藤との関係について本人は、「心もちは出している」どのべていた(一九七二年七月三〇日談)。
- (4) もっとも、この『備忘録・第一』にある在籍者の記録は、研成義塾が一九〇一(明治三四)年四月に県から正式に私立学校として認可されたときからのものを、一期生から通し番号で並べたものであって、一九〇一年以前については不明である。したがって、第一期生として斎藤茂(M44)・在籍番号を示す。以下同じ)らとともに記載されている寺島昇(M15)、原口要(M16)、二期生の西沢永一(M41)、四期生の竹岡喜嗣(M84)らは、別の記録(『東穂高禁酒会記録』)において、すでに前出ししている。つまり、一九〇〇年十二月禁酒会創立満九周年記念会の項に、「研成義塾生徒原口要、竹岡喜嗣、寺島昇、西沢永一諸氏はなしあり」、とあるから、寺島、原口はすくなくとも前年度から連続して在籍したことおよび西沢、竹岡は中断して再入塾したことがわかる。他にもこのようなケースはあっただろうけれども、斎藤については現在のところ不明。
- (5) 斎藤茂「春昼夢」『信濃教育』一九六四年四月号(『後篇』一〇五—一〇六ページ)。
- (6) 斎藤茂「くぬぎ林」『山上』一九二〇年三月(『拾遺篇』一九六八年刊、二五五ページ)。太田(二期生 M37)の方でも、「義塾南棟に自炊生活を許されて寝起する身になった」ことを書いている(平林一「小説『仮寓』について」『キリスト教社会問題研究』第一九号)。両者が同時に在籍したのは『備忘録・第一』では、一九〇二年度のみであるから、この時であろう。また、清沢列(三期生 M33)が、くも生のペンネームで「我研成義塾」を紹介した文末尾に、義塾の「傍には下宿の様な所もある云々」とあるが、それらが、そのころ塾生の一体感をつくるのに益したことだろう(『天籟』第二巻第四号、一九〇六年四月)。
- (7) 斎藤茂「古塚の畔」『創作』一九二一年一〇月号(『拾遺篇』一四九ページ)。
- (8) 斎藤茂「重平君」『読売新聞』一九〇九年八月二九日日曜附録(『中篇』一九六六年刊、二三四ページ)。
- (9) 同(二六—二七ページ)。
- (10) 斎藤茂「虫の音」『信濃教育』一九二五年一〇月号(『前篇』一七一—一七二ページ)。

- (11) 前掲「くぬぎ林」(二四九—二五〇ページ)。
 (12) 同(二五〇ページ)。
 (13) 前掲「重平君」(二三七ページ)。さらに、「斯くして三十五年、私共はまたいつか知らず信仰の世界からのがれ出て、忽ちキリストのキの字も口にせずなつた」(前掲「虫の音」、一七二ページ)と述べている。
 (14) 紫生「田園囁語(四)」「天籟」第二卷第二号、一九〇六年二月一日、研成社。紫生は齋藤茂のペンネーム。かれは東徳高禁酒会に一九〇五年一月に入会している。この雑誌については、「研成義塾の人びと」で一言したが、単なる文芸的人生論雑誌ではなく、井口喜源治をはじめとする聖書研究、信仰告白がもたらしたキリスト教信仰に根ざし、伝教にもえているところもみられる。「田園囁語」もその多くが、信仰について語ったものである。
 (15) 齋藤茂「久保田柿人氏(上)」『信濃教育』一九三二年六月号。
 (16) 前掲「父の顔」(一四二—一四三ページ)。
 (17) 同(一四二ページ)。
 (18) 前掲「春昼夢」(一〇九ページ)。
 (19) 齋藤茂「山のたより」『信濃民報』一九二一年五月(『後篇』四八ページ)。
 (20) たとえば、紫生「田園囁語(五)」「天籟」第二卷第三号、一九〇六年三月号。
 (21) 齋藤茂「農民の疾苦」『信濃教育』一九二五年九月号(『前篇』一六七ページ)。
 (22) 齋藤茂「木曾・奈良井」『信濃教育』一九二四年九月号(『前篇』一四三—一四四ページ)。
 (23) 齋藤茂「夏の日」『信濃教育』一九三三年一月号(『中篇』二二〇ページ)。
 (24) 前掲「虫の音」(一七一ページ)。
 (25) 齋藤茂「炭焼の煙」『信濃教育』一九二二年二月号(『前篇』一五二ページ)。
 (26) カント生誕二百年を期して出版のことが勸説されたが、かれはそれをまともながらも、刊行することを見合わせたという。それは「平生の趣味とは云ひ得ても、研究と名づけ難いもの」であることと、カントの輪廓はつかみえても「その包擁する内容が掴めない」こと、および「カントその人が著述家でなかったこと」、「私はひと度それを知った不徳を敢てすまいと心に決めた」からであった(齋藤茂「選挙運動」『信濃教育』一九二四年五月号、『前篇』一三五—一三六ページ)。

- (27) 齋藤茂「告天子の里」『信濃教育』一九二五年八月号（『前篇』一六三—一六四ページ）。
- (28) 齋藤茂「研成義塾と井口先生」『信濃教育』一九二二年一〇月号（『後篇』九五—一〇〇ページ）。

二 雑誌『山上』の創刊

第一次世界大戦の勃発と、そのもたらした政治、社会、思想の問題は、齋藤の大きな関心事となる。この時期に、従来の文芸的な枠を越えている。とくに大戦下の一九一六（大正五）年以後に顕著で、この年には、『信濃毎日新聞』のほか、はじめて『日本評論』に投稿している。前者には二月に時事評論「戦争と平和と」を連載し、後者には八月号に「英独文明の比較研究」および「誤られたるニイチュエ」を、九、一、一、一二月号に「ゲルマン魂の権化トライチュエ」を連載している。時事の問題を、自立した農民の視点をふまえつつ歴史に学びながら究明する方法は、賢明である。

おそらく、これらの研究発表が、トライチュエの翻訳出版を結びつけることになったであろう。煙山専太郎が留学中に持ち帰った原書（Heinrich von Treitschke, Deutsche Geschichte in XIX）の翻訳依頼を、興亡史論刊行会の代表松宮春一郎がもちこむ。編集スタッフには、箕作元八、白鳥庫吉、大類伸、煙山ほかがいた。齋藤は一年半で、この歴史叙述の傑作といわれるトライチュエの名著を訳出して、この叢書の第六巻『普魯西勃興史』として一九一八年一月二十九日に刊行した。

また、この前後には、「戦末戦後の欧州に就いての考察」を『信濃日報』に二〇余回にわたって載せ、続いて「世界戦争を眺めて」を『信濃民報』に連載し、さらにユニークな「姑息なる平和」を『日本及日本人』に寄せて、ここにも発表の場をひろげている。これらはいずれも戦中戦後のヨーロッパ研究と日本のとるべき道について醒めた考察をおこなっている。

トライチユケの出版は、従来に増して多くの知己をもたらし、とくに犬養毅とは通り一遍ではない親交があった。

翻訳と平行してたかめられた関心と研究は、この仕事が終わったあと「さみしくて」⁽¹⁾、その次の仕事を企画させたようである。『山上』はこうした背景をもとに準備がすすめられて、一九二〇（大正九）年二月に第一号を創刊し、翌年二月廃刊までに一〇号を刊行している。

『山上』の名の由来は、その初期に題字の下に、「爾曹は世の光なり山の上に建てられたる城は隠ることを得ず」というマタイによる福音書五章一四節の句を記していることで明らかである。そして、おそらく一六節を胸中に秘めていたであろう。井口にみたような平凡人としての、たんとした姿勢をたもちながら、しかし、「理想家に哲学があるならば愚者にも哲学がなければなりません。愚者が愚者相応の哲学を発見すること、これを身につけること、そして之を確立すること、之が私共の仕事」⁽²⁾であることを、この小雑誌を通して訴える自負にさええられてもいた。平凡人の哲学獲得が、愚者階級の価値を生じさせる。こう考え、価値における個の独立性を信じていた。かかる個のもつ精神の優位を確信することが、「現代」に処すべき途であると考えていた。『山上』創刊の意図するところを、同人の名においてかかげた「発刊に方りて」から、かれの言葉と思想を抄録しておく。

「われらはおのおの果さねばならぬ使命をもっている。その現われる形こそ小さけれ、その影響する範囲こそ狭けれ、その重要さにおいては、一国の宰相、将帥、一世の碩学、聖哲のそれにゆずるものと、みずから許すことは出来ぬ。人類差別の撤廃、人權の拡張、人間思想の自由を熱求するわが先覚者の叫びが、たとえ世界乃至社会に対して放たれるにしても、おもえば、それはすべて人おのおのに向つて、その目醒めを呼ばわるの聲に外ならぬ。民衆の権力の大きなこと、今の時より大なるはなく、民衆の権力の小なること、また今の時より小なるはない。考えてみれば、為して遂げられぬ例はなく、しかも遂げんとしてよく為された例がない。われらは国家と国民とあるを知り、社会と人とあるを知りながらも、其処にわれら自己の位置をおもふこときわめて鮮い。われらはしばしば、歴史と英雄に

ついで語り、文明と進歩について語りもするが、其、処、に、わ、れ、ら、平、凡、人、の、価、値、を、考、え、る、こ、と、が、き、わ、め、て、稀、で、あ、る。近代生活の特質は、万人平等の権利を保持するにある。しかも平等の権利は平等の義務を意味する。われらが社会、国家、世界に負う責務は、個人として、国民として、人間として、ただちに人その人のうえに落ちてくる。われらの誰しもこの責務を他人の肩にうつすことは出来ない。（中略）

『世界改造』——その裏に人間生活のルネサンス、人間思想のリフォーメーションが源を發せねばならない。産業の繁栄と富の増大とは今後も遠くつづくであろう。されど、それは更に久しくも人の精神生活も攪乱し、又はこれを征服するの力を保つべきではない。いかにして人間の目醒めたる魂がこの恐るべき威力の下より脱し、いかにして『叛逆者』の大旗がこの忌むべき時代精神に対してひるがえるかによって、第二世紀文明の主潮は定まる。

日本固有の国民精神を蠱毒し、日本伝来の国民生活を脅威したのは、精神的内面生活の欧化ではなくして、物質的、外面生活の欧化である。（中略）それらのものは、わが旧日本に大きな恩恵をもたらす媒とはなつた。されど今それは、かえつてその偉大な力をふるつて、逆にわれらを脅威し、破壊しようとする。

明治時代の初中葉に欧米文明への心酔を戒めたのは、大体誤つていた。今日欧米文明への随喜渴仰は多分に迷つてゐる。日本の危機は仏耶兩教の衝突よりも、日清日露の戦争よりも、大正の政変よりも由来しなかつた。また国をあげて民主思想の浸潤よりも来るべきではない。それはじつに、精神をこえて物質の尊重、およびこれに伴なう社会現象の悪化から来るのであらう。

人間の生活の上におよぼす物質的圧力を斥けて、この束縛からわが魂を解放することは、すなわち、人を現在の動物の状態から再び人間に還らしめることである。然り、われらはいま、われらが真に人であることを考えてみねばならぬ。（中略）科学の発見は人間が物質的天然の主人なることを教えつつ、しかもこれを誘うて物質的天然の奴隷たらしめた。自主は少くとも奴隷であつてはならない。文明は少くとも野蛮であつてはならない。

戦後のいわゆる『改造』が、人類の自由、平和のさらに確実な保障、人民の権利、義務の拡張を目的とするは大いによろしい。されど、もしそれが物質上の富みと権力を中心とし、さなくとも、単に政治上社会上の個人的利権を中心とする制度の上へのみ限られ、人間そのものの『改造』に及ばぬのでは、われらは其処に新しい日本に、如何なる立脚地を求め、生活の真の安寧と福祉をそれに繋ぎとめることが出来ようぞ。随って、日本がその将来の発展の道を如何なる方向に見出しえようぞ。日本は世界の資本国たるであろうか。そしてよくこれに満足するであろうか。わが国民は生活の手段と状態にあらんかぎりの保護をえ、世界の富を身に擁して、しかもネーデルランドのそれのごとくみずから生活そのものを失うの危険に安んぜんとするか。外にますます膨脹しつつ、内にいよいよ委縮するの悩みに甘んぜんとするか。

(中略) 日本みずからのために、また世界人類のために、日本を救うは、日本人を今にして物質文明の悪夢から免れしめるにある。人類の課業は、また日本人の課業である。日本人の課業は、われら個々人の課業である。われらのおのが、果さねばならぬ課業のために、自由にして純なる魂、厳肅なる心、熱烈なる愛と道義、深玄なる知慧、眞実なる公共精神、現実に対する、堅忍なる信仰に加うるに、さらに、深き自覚と、さらに、鋭き正義の念を欲して止まぬ人々こそは、私共の師父であり、僚友である。

この小さき『山上』はおもふせながら、この友垣がやがて起るべき大運動に合する精神団結のために生れた。(中略) 私共自己が存在の意義を發見せしめ、世をしてこれを認めしめよ。(中略)

私共の聲は野をさまよう旅人の呟である。私共の叫びは山の頂に立てる獵夫の合図である。あるいは草深く首を俛れたる求道者の祈である。人の耳に達せずして、直ちに天に到る。

名高き人の名に恃み、力強き人の力を藉るには、あまりに微々たるこの課業、これをして無名にして力弱き者の多くの腕によって成さしめ、いつかは、高き山の上の烽火として、昇らしめよ。私共はただ使徒パウロの言葉をとって進む

であろう。——『われら四方より患難を受くれども窮せず、詮ん方尽くれども望みを失わず、迫害らるれども棄てられず、跌倒るも亡びず。』（傍点は宮沢）

抄録しようとしながら、その大半を残してしまった。第一次世界大戦後の日本と世界に視野をひろげながら、しかも個の立場から状況を受けとめようとする主張は、同時に第二次世界大戦後の問題でもあったからである。『山上』は、斎藤にとって、もう一つの『天籟』ではなかっただろうか。かつて神の国をアメリカに建てようとした精神が、いま、自己の利益のためにでなく、人としての義務を果たすために団結できる精神の王国を生み出そうとする渾沌が、この大戦後の意味である、ととらえようとしていた。こんどは、それを独力で訴えようとしたのである。

次に、まず雑誌自体についてみておく。

体裁はA5判で、終始三〇ページ前後の小冊である。一応毎月一回一五日発行としているが、いづれもかならずしも守られないし、二回欠いている。発行所は斎藤の住所と一致する山上社である。発行編集兼印刷人は、はじめ友人の青柳甲子雄（信毎記者）であり、豊科町の五三印刷株式会社で刷っていた。のちには斎藤自身の名にかえ、印刷所も長野市の柏与印刷工場に変えている。定価は一部二〇銭郵税五厘、総て前金を訴えている。斎藤の記憶では約一、〇〇〇部を刷っていた。発売は山上社のほか大売捌所として高見書店（松本）、西沢書店、河原書店（のちには大正堂を加える。以上長野市）、岩波書店（東京神田）をおいていた。少数の広告を前後に載せているが、その料金規定もかかっている。山上の題字は、はじめ木暮理太郎だが、のち犬養毅が書いている。

内容は、いうまでもなく大半は斎藤自身のもの⁽⁴⁾と、かれによるラッセル、トライチュケ、ヘンリー・ジョージなどの翻訳を掲載している。これに加えて、次のような人びとが寄稿している。桐生悠々、植原悦二郎、山本鼎、畔上賢造、藤森秀夫、鈴木栄吉、島木赤彦、塩谷鶴平、河野齡蔵ほかである。

『山上』が創刊されると、井口は『聖書之研究』や『ときこのゑ』のように、これを知己に送ったり取次いだりして

いる。しかしして、その反響のなかでもっとも印象的なのは、研成義塾の成果と評価している中田信蔵の「井口教兄へ」宛てた書簡にみられる。⁽⁵⁾

これに先立つ第二号の編集後記には、「乏しき力を以てして最も大なる事業に膺らんとした冒險的決心が罪と呪とを以て遇はれず、愛と歓とを以て迎へられたことを見た時に私共の寂しい心が春に逢ひ、私共の荒める魂が神を見た如く、只恵の恩の量ることの出来ぬ深さ」を知った、と感謝をもつて記している。また、一九二二年一月号の巻末に賀詞を寄せ、『山上』の「意義ある成長」を祈るとした犬養毅、石原謙、岩波茂雄、茨木猪之吉、茅原廉太郎、辻太郎、植原悦治郎、大類伸、畔上賢造、久保田俊彦、藤森成吉、藤森秀夫、木暮理太郎、森田恒友(以上東京)、山本慎平、河野齡蔵(以上長野市)、桐生政治(名古屋)、塩谷宇平(岐阜)らも濃淡はあろうけれども、一応支持者とみていいだろう。しかし、郷土出身者を中心とするとはいえず、彼らは中央に偏しており、実際の読書層としては、やはり信州の小学教員層が中心でなかったかと思われる。斎藤の比較的身近にいた者に、百瀬精市(一九一三年三月長野師範卒)、青柳直樹(松本中学卒業後上京横井時敬の門にあつたが、健康をそこなつて帰郷、代用教員。のち農業のかたわら残雨と号して俳句をよくした)、白樺教師の田中嘉忠(一九一五年三月長野師範卒)らがある。⁽⁶⁾『山上』の印刷所を長野にうつすようにはからつたのも、また一九二一年以降の『信濃教育』へのレギュラー的寄稿者となる機縁をつくつたのも、読者である教師を介してであつた。

ただ非常に身近にいたと考えられる手塚縫蔵とは、手塚と井口との深い交友があつたし、友人の百瀬精市が手塚の松本聖書研究会の第一回(一九一六年六月四日)からの熱心な出席者であり幹事に推されるといつながりをもつていたにもかかわらず、斎藤はほとんど拘らず、その講筵にも一〜二回参会、それ以上にはでなかつた。⁽⁷⁾おそらく思想的体質において異質の人であつた。また、『山上』が短命であつたことにもよるが、研成義塾の人びとに、かならずしも多くの読者をもたなかつたことも注目される。⁽⁸⁾

思えば、渡米組のシアトルにおける雑誌『新故郷』、鳥川村の『山上』は、ともに『天籟』に源流をもち、太田喜代松、清沢冽らも筆をもつ機縁をそこにえていたといえる。

『山上』は、前記のように一年間一〇号という短命なものに終わった。しかし、この時期以後の齋藤のさかんな執筆状況からみても、雑誌を継続する意図がすでに満たされて終ったとは思えない。基本的には、経済的困難が原因となっている。廃刊直後に『信濃教育』に寄せた文中、暗に『山上』に触れて次のように省みているのは、おそらく廃刊の最大の理由であったであろうことをうかがわせる。

「先年小さな雑誌を経営した時に読者の或教を得る必要から、私自分の知れるはもとより、私の知人の知人の先々や、名前のみ聞き知った相当地位の人たちに其購読を依頼した。其中に最初から断った人も少くなかったが、併し大部分の人は承諾してくれた。のみならず、かなり多くの人から賛成や激励の言葉を貰った。尚そればかりでなく、此困難にして有意義の事業のため経済上多小の援助をしてもよいとさへ言ひ越してくれた人も二三にして止まらなかつた。私は未熟な私の仕事に対するこれ等同情を涙を以て感謝した。

然るに誌代と云ふ段になつた時『同情』は単に言葉の上のお振舞であつたことを知るの多きに驚いた。或人々はこちらから註文もせぬのに送つたのだからと何冊も束にして戻した。又或人々は寄贈かと思つたので受けたが、さうでないならば忙しくもあるしお断りすると云つた。最初大概の諒解を得たのであつたが、あとでかれこれ云ふのも愚痴っぽく、強情のやうにも思はれて、其儘にした。(中略)兎に角これも自分の軽信と馬鹿正直とからお蔭の損失を招いて、そんなことが一つの原因となつて雑誌社の屋台骨をへし折ってしまった。⁽⁹⁾」

経営に関連して、『山上』中に次のうよな主張を明らかにしている。つまり、純地方記事雑誌に転換させることによつて、経営の安定をはかるように勧める者のあつたのに対して、その厚意を謝しながら、六〇〇ページの雑誌が「一円五〇銭で買えるときに、この三〇ページの雑誌に二〇銭を払つて、「尚安価なるを思ひ、然らずとも其高価を忍び得る一

種特別の価値を見出す人のみ私共の金銭は通用」するのであると訴えている。創刊の辞の主張を譲ることは、もはや刊行の意味を失うことである。「不遜の言ながら、将来我誌でなければ見ることの出来ぬ特色を全体の上に明かにしたい」という姿勢は崩さなかった。のみならず、新聞に「一尺角の文字を以て広告」する有名雑誌と、その雑誌によって主張される社会改良運動の皮肉とを指摘することも、避けようとはしていなかった。いかに高踏的で、短命でもあったが、同時期の信州の白樺教師の雑誌『地上』ほどにも組織をもたなかった斎藤にとつて、精いっぱい⁽¹⁰⁾の試みであったし、かえってかけられない精神に支えられた始末であったといふことができる。

- (1) 斎藤茂の談話による（一九七二年七月三〇日）。
- (2) 斎藤茂「編集のあとに」『山上』通巻第九号（『拾遺篇』一一〇ページ）。
- (3) 『山上』第一号（『前篇』一一六ページ）。
- (4) 宮沢正典「研成義塾の人びと」『キリスト教社会問題研究』第一六、一七号、一〇七ページ参照。
- (5) 一九二〇年八月二四日付井口宛書簡は、「『山上』御配慮により同社より送られ拝読致候。斯る士の貴塾より出で候事心強き限りに候。経営御困難の裡にも以て慰むる一端と被存候。」にはじまり、二〇余年の惨胆たる苦心と将来について熱い励ましを送っている。そして斎藤を井口の後継者に擬してみてもいる（斎藤茂編『井口喜源治』一九五三年、研成義塾校友会刊、一五一ページ）。
- (6) 彼らを中心に、数年前から、いまも「蕎麦の会」と称して時に応じて会食し交友をもっている。
- (7) 斎藤茂の談話による（一九七二年七月三〇日）。
- (8) 研成義塾関係者に関しては、平林義行、白井素慶次に取り次いだことを、井口は斎藤に知らせている（一九二〇年三月八日書簡）。ほかには斎藤の『天籟』の同人の範囲に限られているようである。なお、『中外商業新報』にあった清沢列は、広く読ませたい雑誌であり、広告をすすめている（一九二〇年一月三〇日書簡）。
- (9) 斎藤茂「田舎ッペス」『信濃教育』一九二二年七月号（『前篇』九九—一〇〇ページ）。
- (10) 「編集のあとに」『山上』通巻第九号。

三 世界大戦と戦後処理への視点

斎藤は『山上』と平行して、その前後には、『日本評論』『日本及日本人』『信濃日報』ついで『信濃教育』などに、さかんに執筆している。その面での、生涯におけるもっとも充実した時代であったということが出来る。この時期におけるかれの論説について考察してみたい。

かれには数個の課題があるが、その第一のものは、第一次世界大戦と戦後における世界に関する考察である。

第一次世界大戦は、その実態とは別に、ドイツ、オーストリアの専制と軍国主義に対するイギリス、フランスの民主主義の戦いであると喧伝された。さらに、国民主義対国際主義、個人主義対四海同胞主義、武断主義対文化主義の戦いであるということも繰り返されていわれた。これらはいずれも大戦の動機に深くくいっている原因ではあったが、戦争目的を列強の世界政策における拮抗の問題であると自称することは憚っている。ともあれ、こうした周知の見解に対して、斎藤はそれらの根底にあるところの道德の頹廢、信仰の欠乏を戦争の原因として立論しているのである。

斎藤の見解は次のごとくである。

プロシアによるドイツ統一は、全ドイツのプロシア化であった。それは権力と兵力の具体化を意味する。ここでは、教化は物質的教化、精神は服従と統御の精神、欲望は征服と支配である。これがドイツ教化の概念とその使命となる。こうして、プロシア化した歴史と物質化した哲学とが結合して、それが現代ドイツ文化の根底をなす水流となった。

ここにおいて、古く尊ぶべき理想主義は亡び、近代帝国主義がそれにとつてかわる。かくて物質主義が国民の荣誉ある精神生活を萎やし、軍国主義が人民の崇高なる道德観念を腐らせたのである。

この新しいドイツの哲学を高唱したのがトライテュケであった。かれは、国家が権力であること、戦争が国家第一の、かつ根本的な職能であることを疑わない。ホーフエンツォルレン家以来主権者は王であり、かれが統治するともに支配するという古代のオートクラシーの制度は、そのままプロシアに激濁として生きていると考える。「歴史家と

してよりも幾十倍かの愛国者」であつたトライチユケにとつて、種族の矜は感情として、愛国心は宗教として、忠誠は信仰として発露した。この熱情とおそるべき真面目とが、ゲーテやヘーゲルにかわつて、かれを新時代の偶像たらしめたのであつた。そして、ドローゼン、ジーベル、ペルツ、デルブリック、ヘウセルらの一群の史家は、ドイツの世界使命についてのインスピレーションを与える業績のゆえに、トライチユケからプロシア学派の讚美者ユーベリアスと呼ばれた。さらに、ベルンハルジ將軍は、これを大胆に力説したのである。

ビスマルクは、こうして形成されたドイツ国民精神の新理想を、巧みに改悪し逆用すれば足りる。あるいは、かれには時代の政治哲学者もしくは歴史家と無縁であつたかも知れない。ビスマルクの役割は、実行であり、組織家として、政治上人間が国家のために存在するという信念を、具体的に遂行すればよかつたのである。ただ、その政治の遂行過程で、こうした講壇の奉仕者たちを得ていたことは、かれにとつてけつして不都合なことではなかつた。

カント、ゲーテ、シラー、ワグナー、ベートーヴェン、マルクスらにかえて、フリードリッヒ大王、ブリュッヘル、モルトケ、ビスマルクらへの転換は、その觀念を世界ではなくて祖国、人類ではなくて民族、その理想を思索ではなく実現、心智的ではなく物質的に、導いた。かくて、自ら唯一の選ばれたる民としての觀念は、「カイゼルから百姓に至るあらゆる階級のドイツ人の心と魂に」対して、数十年にわたつて注入され、そこに排他主義が胚胎したのであつた。⁽¹⁾

しかし、齋藤は、プロシヤ化したドイツの頹廢を断罪し、それだけをもつて道德の頹廢としたのではない。とりわけ、善悪正邪や価値の判定にかかわる問題を、歴史上の一時期の断面をもつて断案することは危険であるとした。

イギリスに関しても、目を向けるべきである。ドイツを断罪した時点では、「人類の棲息し得べき地球表面の五分の一の面積を奄有して、而して之を保護するにも猶過ぎたる龐大なる海軍を備えた英吉利は、其政策として軍国主義をとる必要は毛頭なかつたのである」⁽²⁾。しかし、青年ドイツには、イギリスがこうした地位を占めていたればこそ、軍国主

義を唯一の政策としなければならなかったのである。たまたまこの時点において、自己に不必要であったにすぎないものを、善悪正邪の道徳的価値観をもって誇言するイギリス、フランスが、ドイツとの戦争目的に、ドイツの悪徳の征圧を掲げること、ドイツとの同罪性を論破している。しかも、「尠くともその悪しき帝国主義をもって英吉利国民精神を征服したるものとしてローズ、チェンバレーン、キプリングが英吉利作家政治家の名であることが記憶にある間は」、戦争目的を一方的に承認することはできない、というのである。

このように、交戦国の双方を相対化することで責任の相殺を計ろうというのではない。相対化しうる冷静な視野と、道徳の頹廢を大戦の真因とする観点に立つ齋藤からすれば、戦後処理における連合国側の独善は看過できないものであった。

大戦前における道徳の頹廢が改められることなく、むしろ、一方的に増幅されることによって戦後秩序の恢復が策されてきたからである。つまり、「道徳が興起し、信仰が恢復されざる限り、仮令和約成文に幾万語を費せばとて、それは死文であり、其効果は反古紙以上に出ぬ」³のである。国際連盟を結んで、軍備縮少を約し、おもむろに主義思想の改善をすすめるのでは本末顛倒である。逆に、信仰がそれらに先行し、はじめに思想の改善が行われてこそ、国際連盟も軍備撤廃もしたがってくる。だから、国際連盟、軍備縮少撤廃は政策ではなく、「それは実に人間の変化せられたる精神に随う徳義である」³。しかるに、平和のための再協定あるいは改造の名において、もっぱら軍事的、政治的かつ領土的な膨脹を欲し、なんら人間思想の改善、政治観念の変革はなされず、またなんら文明の軀機を見出しえない。ドイツと同罪であるべきイギリス、とりわけフランスの戦勝をもって、こうした強行が免罪されるとすれば、その日から「欧州第二次戦争の卵を孵化」しつつあるのであり、再協定や改造をもって「世界の平和に一時の小康だも得たりとするものあらば、嗤うべき短見者流である」といわなければならぬ。

このように論じて、次の文をもって結んでいる。

「凡ての協定、凡ての改造——世界が目して新平和と為すところのものは、斯くの如くにして糊塗さるゝのである。自覚なき人類、國際主義の仮面を冠りたる國民主義、飽くなき經濟膨脹欲は、今後十年二十年に果して何を成就せんとする。信仰なき國際連盟が軍事的意味に於て、或は經濟的意味に於て、戰爭同盟と變貌することなくんば幸いである。」⁽⁴⁾

ひるがえって、わが国は、この大戦にどうかかわるのだろうか。

如上のドイツのために「極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ是ニ於テ朕ノ政府ト大不列顛國皇帝陛下ノ政府トハ相互隔意ナキ協議ヲ遂テ兩國政府ハ同盟協約ノ予期セル全般ノ利益ヲ防護スルカ為」の「必要ナル措置」⁽⁵⁾が、日本の公式の參戰理由とされたのである。連合与國の道をとつた日本が、ドイツの軍國主義破壞を叫ぶのは、あるいは自然の流れかも知れない。

しかし、斎藤は次の二点において問題提起をする。

その第一は、はたして「我日本現今の政治を軍國主義とは云うべからざるか」という疑問である。たんにドイツの打倒、しかるのちの平和を希求するだけでなく、これは、平和會議において世界列強の間で論議される前に、「我國自身が解決し置かざるべからざる緊切の問題ではあるまいか」。「吾等をして強ちに独逸に同情し、又連合國側に在つて日本の地位を墮す者と為す勿れ。之は凡てに亘り自由なる討究と大胆なる説明と共に徹底的の態度を要する問題であることを深く弁えねばならぬところである」⁽⁶⁾という提言である。

しかるに、戦時下の日本では、戦争の教訓の名のもとに、小中学の少年のみならず大学生にいたるまで、「軍國主義的中世紀思想を扶殖せんとする陸軍、文部、内務当局者」のなすにまかせている。しかも、國際的には、「英國の尻馬に乗ることを之れ能事とする吾が政府者國民先覚者は、徒らに之に附和雷同することを知つて、其の真意の存する所を

窺い知ることの出来ぬは、其愚の致すところ、実に憂うるに堪えたるものがある」⁽⁷⁾のである。昨日のドイツの道を、今日わが日本は、連合与国である安心のうちに歩みつつある。明日の日本は今日のドイツの命運と無縁でありうるのか。「其時、自信と覚悟と用意を欠いた国の悲惨なる運命として歴史の記すより、適切な例を日本が示すことなくんば幸いである」⁽⁸⁾ (傍点は原文) という危懼の言葉をもってする問題である。

第二の問題点は、戦後の平和保障のための協定に臨む日本の立場についてであらう。たしかに、わが国の戦争目的は、「平和永遠」という人類最高の精神のために、力の支配に対して「義」のために戦いつつあることが宣明されてきた。しかし、「云うを止めよ、我国に何等世界に誇るべき自由と平等があるか。何等勢力に支配せられざる崇高なる人民の権利があるか。而して何等最高の精神の感激が世界の文明に貢献したか」⁽⁹⁾ (傍点は原文)。義戦を戦うという日本と、その日本の事態とのこの乖離を問題にしなければならぬ。

すでに述べたように、斎藤の提起する平和会議の目的は、ドイツの破砕ではない。道德の復興、信仰の恢復こそがその前提である。この背反はイギリス、フランスのみならず、日本の問題であることを繰り返かえし訴えたのであった。

第一次世界大戦との遭遇を、斎藤は、ただその規模においてというのではなくて、歴史上の一大転換に遭遇したと認識していたようである。そうでなくては、かれをこのような方向に駆立てたとみることができらうか。⁽⁹⁾

「吾等が今日の戦争を歴史上大なりと為すのは、人間の感激と宇宙の啓示との強く深きを云うのである。戦争の目的は形而上学的に見て、連合国の声明するより猶重大である。而して其達成は吾等連合国の為し得べき力に余つて、猶悠久である」⁽¹⁰⁾ (傍点は原文)

斎藤が、この大戦から汲みとろうとした意味は、このようなものであった。帝国主義戦争としていわゆる科学的論理性においてだけとらえるのではなくて、深い人間の歴史のなかで、高貴な人間性の発見の機会を見出そうとしたのである。といったらいすぎだろうか。『山上』のマニフェストは、精神の優越ないし精神の信頼の主張であった。

- (1) 斎藤茂「世界戦争を眺めて」『信濃民報』一九一八年六月。「組織家としてのナポレオンとビスマルク」『山上』一九二〇年二月(いずれも『中篇』に所収)。
- (2) 斎藤茂「独逸文明の征服」『信濃毎日新聞』一九一六年二月五日—一〇日(『中篇』九一—九二ページ)。
- (3) 斎藤茂「姑息なる平和」『日本及日本人』一九一九年六月一日号(『中篇』九七ページ)。
- (4) 同(二〇〇ページ)。
- (5) 「独逸国ニ対スル宣戦ノ詔書」近代史料研究会編『明治大正昭和三代詔勅集』一九六九年、北望社刊。
- (6) 斎藤茂「戦末戦後の欧州に就いての考察」『信濃日報』一九一七年一月五日(『中篇』一四〇—一四一ページ)。
- (7) 同一月一日(二五九ページ)。
- (8) 同(二六〇ページ)。
- (9) 中世と近世との境界に立って苦悩したダンテに対して、同様な時代の転換点にあるものとしてある共感をもったようである。「ダンテの政治哲学」(『日本及日本人』一九二二年六月—十五日号)の研究は、そうした産物のように思える。
- (10) 前掲「戦末戦後の欧州に就いての考察」一九一七年一月一日(『中篇』一六二ページ)。

四 白樺派批判

斎藤が除隊して、あの百姓と文学の宣言をおこなったころ、雑誌『白樺』が創刊されている。そして、かれが『普魯亜勃興史』を訳出した年に、武者小路実篤の「新しき村」が建設されている。

個性の尊重に基づく理想主義的な人道主義を標榜する『白樺』の自由な雰囲気は、長野県下の主として青年教師に受けいれられ、このころまでには、いわゆる「白樺教師」の一群が出現していた。かくて一九一九(大正八)年の『白樺』の会員数は、東京に次いで長野が多く、続いて京都、兵庫、大阪、神奈川、千葉などの順であったという。そのヴォルテージをうかがいうる。

しかし、白樺教師による斬新な教育は、またそれへの抵抗のあったことも無視しがたい。白樺教師を追放した同年二月の戸倉事件は、⁽¹⁾そうした抵抗を背景にしておこされたものである。さらに九月には、この事件の中心にいた赤羽王郎（一雄）らによって雑誌『地上』が創刊されている。「地上に天国をつくる」という意味であるが、内容、体裁ともに『白樺』を模したものであり、「『白樺』の精神を信州の地に土着させようとするものであった」という。⁽²⁾すでにこうした弾圧と受難を背景にもつ同人たちにとって、『地上』はいわば「人類的である」という信仰告白をした人びとの、信州宣教の団体としての体質を帯びていたのではないだろうか。そして、ペロテとアンデレたるべき中村亮平（会楽小学校）は、家屋敷を処分して家族とともに「新しき村」に参加し、これに続こうとする教師もあつた。

こんにち、信州における白樺教育の評者たちは、「因習的な村人の反撥」や、悪役山本聖峰（慎平、長野新聞主筆、県議）の「個人的政策的」なものにのつた県当局に対して、まことに厳しい。それはそれで妥当であろう。そして、白樺教師たちは、「数学や科学教育を重要視せず、長期的な教育計画の不足、性急に過ぎたとかの欠点はあつたであろう。しかし、彼らは教育の本質をふまえ、現在及び将来の教育のむかうべき豊かな正しい芽を持っていた」し、その教育理念は「今後の新しい正しい教育の方向であろう」⁽³⁾（傍点は宮沢）と結論している。「正しい」芽や「正しい」教育というその自信は敬服に価するが、要するに、「しかし」以前のことがらは、「しかし」以後の信念によって免責されているということが出来る。

さて、一九二〇年創刊の『山上』は、如上の時代相を背景にもつていたのは事実である。斎藤の関心をとらえたのは、第一次世界大戦と戦後における平和の問題であることは前節で述べたが、かれの第二の重要な論題として、白樺派に対する批判をあげることが出来る。しかして、その批判は「村人」や「権力」と同列だったのだろうか。

白樺教師に触れた『山上』の小文では、軽卒の論を慎み再論することを記して、次のように述べている。
 いわゆる白樺教師は、人道主義思想をもつて、これを社会に実現し、旧社会の因襲旧弊を打破する手段としているよ

うであるが、しかしこれは、「宗教的哲学的道德的根柢を有する良心を喚び出して理解し得る社会最高の理想」であつて、「真に人生に対する苦験を経たる人にしてよく味得し得るの一境地」である。はたして文芸などによる表面的な手段を通して、よくその意図を達しうるだろうか。たとえその教育が健全な新思想、徹底した社会観念に立脚していたとしても、これを直ちに發育未熟な児童の脳裡に注入することで、所期の効果をあげうるのだろうか。トルストイの寓話お伽噺には興味をもたれても、そうしたいわば氣分的なものに拠つている教育は、「大にそれは人格上危険なる企て」といわなければならぬ⁽⁴⁾と。

そして、前記の中村亮平が、新しき村に別離して帰郷したとき、斎藤は「旧文芸の破産」を宣告している。それによると、武者小路一派の芸術がトルストイに学んだことは事実であろう。

「しかしながらおもうに武者小路氏はよくかくのごとき至高の芸術を生産するの目的に添う宗教心と生活上の試練及至苦験を経てよく宇宙の力を体得した人であらうか、われらは然るを信ずることが出来ぬ。氏が果してどれだけの意図と決意を抱いてその処女地向つたのか、かくのごとき至高の芸術を生産すべき素質をまた氏が所有していたかに疑いなきをえぬ。たとえそれを或る人々の見るとき物好きと遊戯の氣持で下つたものと見ないまでもわれらはその真剣味に多分の疑問を持つものである⁽⁵⁾。」

とみる。斎藤によれば、芸術は芸術家によつて感受される感情を人に伝えるものである。そして、この感情は全く自然にして真純なる生活を営む人によつてでなければ、とうてい生起しえないものである。にもかかわらず、「トルストイの人生を味わわずしてトルストイの芸術を産せんとせばそれは滑稽であり、又悲惨である」ばかりでなく、「贗芸術」といわなければならぬ⁽⁵⁾。これと同様の矛盾を、有島武郎の態度と日常の主張との間にもみてとつてゐる。有島の情死は、その虚偽的生活にもっともふさわしいものであり、かれが新しき村に真に賛同していなかつた人であつたとしても、面をそむけずにいられないような敗残者の見苦しさだと、斎藤はみていた⁽⁶⁾。新しき村の建設は、「旧文芸（茲には

白樺派)の没落道程」であり、武者小路について「特にいえばわれらは新しき村の敗残を願う」⁽⁷⁾のである。それは武者小路にとどまらず、日本文芸家のための提言であるといっている。

こういう主張のための視座は、やはり独立した農夫にして文学を営むものの自負であろう。「古い教育しか知らない」村人ではなくて、トロローを「コンコードの野人」と呼んでその評伝を書きあげた人のもつ不満である。斎藤が、トロローの二年半にわたるワルデンの生活に思いを寄せたのは、「その生活が単独の如くして単独ならず、奇異に似て奇異ならず、その信条が凡て踏み迷える生活慣習を本来の正しき道筋に引き戻さんと呼びかける声であることの注意を一人の人に対してでも促し得ば」⁽⁸⁾十分というところにあった。

これらを対比させつつ、斎藤が問題としたのは、「現代的智能と原始的粗野とは生活上一致することの出来ぬものか、あらゆる生活様式の基礎となるべき何等かの精神力なるものは存せぬか」という力点をもったものであった。いたずらな「人類的」観点にたつたと称する実験ではなくて、まさに「村人」そのものに呼びかけうる真摯な生活に根ざしていなければ、およそこの精神力とは無縁である。こうした精神力こそは、かれの探求してやまなかつたところのものである。

- (1) 荒井勉『信州の教育』一九七二年、合同出版刊、一四九―一六一ページ。信濃毎日新聞社編『信州の百年』一九六七年、同社刊、一五七―一六二ページ。小林多津衛「中谷勲八白樺教育」『信濃毎日新聞社編『信州の教師像』一九七〇年、同社刊に所収などを参照。
- (2) 荒井勉、前掲書、一五五ページ。
- (3) 小林多津衛、前掲論文。
- (4) 斎藤茂「小学教育に対する新しき試」『山上』一九二〇年三月（『拾遺篇』五七―五八ページ）。
- (5) 斎藤茂「信仰にかざる旧文芸の破産」『山上』一九二〇年九月（『拾遺篇』九〇―九一ページ）。
- (6) 斎藤茂「死」『信濃教育』一九二三年八月号（『前篇』一二ページ）。
- (7) 前掲「信仰にかざる旧文芸の破産」（九一ページ）。

- (8) 齋藤茂「コンコードの野人」『日本及日本人』一九二二年七月一五日号—十一月一五日号（『後篇』二八八—二八九ページ）。
- (9) 齋藤茂「文化生活」『日本及日本人』一九二二年六月（『前篇』三〇ページ）。

五 庶民大学を起すの議

第一次世界大戦終結の直後、原敬内閣は、第四一議会で四大政綱の実現を期し、高等教育機関の拡張をその中の一つにあげている。戦中戦後の変化に対応するためであった。大阪医大の新設、東京高商の商大昇格、東大・京大経済学部の独立、大学令による私立大学の設立、官立高等学校の増設などは、当然その前提である中等学校の急激な新設ともなっていた。原内閣の教育政策の功罪については、歴史によく論じられているところである。齋藤は、中等教育について楽観的でない批判を、この時期においておこなっている。ここでは、かれの第三の論説として教育論をとりあげる。

まずかれは、現実の中等教育の存在意義を疑う。当時の日本にあって批判の集中した初等教育は、むしろ人格者を擁して比較的堅実な進歩をとめない、大学教育さえ生氣のあることを認める。しかるに、「今日の中等教育に人の子を賊し国民を過まるの甚だしきものあるの事実を見ては、時には中等教育そのものさえも呪わずにはおられません」と、痛論している。

その第一の理由は、中等教育の掲げる目的について、子弟、父兄、国家それぞれがどれほどの信念と希望を持っているのか、という疑問からでている。むしろ中等教育の普及が国氏文化をレベル・アップさせ、国家の幸福を増進するという通説を否定し去るのではないが、それをにわかに承認できないというのが次の理由である。

中学校の急増は、入学志望者の収容力を、従来の三々四割から今日の五々八割にし、地方によっては志望者数を募

員集数がうまわって一二三割にさえなっている。この事實は、「智能低き者にも中等教育を受くる機会が与えられ」、一見本人にも社会にも幸福のごとく感じられる。しかし、それは「結局は一個の遊民となり、終るのであります。これは低能者への誘惑教育(この文字特に注意ありたし)の錯りなき道筋と結末であります。果して然りとせば、国家の教育は無知なる民衆を率いて陥穽に陥れるものと誣いられても何の弁解の辞がありませんよ」と。

いまからみれば、まさに隔世の論ともいえようが、逆にABC、因数分解もよくしない人を高等学校に「全入」させようとし、大学生一八〇余万を擁するいまの方が笑止なのかも知れない。ともあれ、当時にあつては、中等教育が「愚者をかばい痴者を保護するための智者賢者に課するハンヂキヤップ」であつたとみるならば、それは決して機会均等を意味しない。斎藤のいう新社会第一の理想である教育上の機会均等は、貧富によつてではなく、「その智能さえある者であれば誰でも受け得らるること」の謂⁽³⁾であつて、中学校の新設がただちに機会均等を意味するのではない。そして誤解を避けるためには、かれのプロレタリアン・ユニバーシティーの構想をあわせてとりあげておかなければならない。

日本の大学は、国家の大学でも国民の大学でもなく、「一二特権階級の大学であり、ある者どもの個人的地位、名譽のための大学である」というのが、斎藤の見解である。この特権的閉鎖的な大学に対して、かれの大学観と改造案を次のように提起しているのは注目されていい。

「所謂「大学」(ユニバーシティー若くはアカデミー)なる語が単に「高等専門教育を施す学校」のごとき狭き意義に解せらるべきでなく、社会的・国民的、且つ人類的最高人格教育を一般市民に授くるのもまた大学の一部——しかも主要なる一部——の職能たることが見落されてはなりません。

即ち大学教育なるものは、その資格に何等歴上の制限を設けず、極めて自由に一般学徒の間に行わるべきユニバーサル的高等教育でなければなりません。大学が国力の消長と関係する所深いと云わるるのは、そのものが単に俊逸

せる技術者、有能なる官吏を産み出すからではありません。社会、国家における人類の幸福を増進するものとして優
良なる公民を作るからであります。」

しかるに、そこからもっとも遠い現実の大学教育の誤謬は、緊切に改造をせまられている。

「この時機に当って私どもはそれが改造の手段として先ず庶民大学の建設を提唱します。然り、農夫でも、商人で
も、職工でも、判任官吏、将た下級勞務者でも、男でも女でも、青年でも老人でも、心あるもの、力あるもの、理解
あるものが自由に学生たることの出来るプロレタリアン・ユニバーシティー謂って「庶民大学」を起すの議を世に問
います。」

しかしそれは、個人の立身榮達のためではなく、△有能なる公民▽のための開かれた大学の構想であつた。同じころ
開設された信州の教員を中心とする夏季大学に触れて、これに期待を寄せている。ここにいう△有能な公民▽は、決し
て△民▽を意味しない。かれは教育の目的を△人▽をつくることにおいていた。その相違は、△人▽が「人間精神の完
全なる発達を目的とする」のに対して、△民▽は「国家の権力の最高伸暢をその目的とする」ことである。かれは、カ
ントにならつて、教育が宗門の道具であつてはならないこと、さらに、国家もしくは君主の道具ともなつてはならない
ことを明らかにしている。

宗教にかわつて国家が第二の宗教と化し、国家精神の讚美が第二の信仰となつてゐる状況のなかで、かれは細心に、
国家に対しても、教育関係者に対しても、△人▽をつくるための教育の目的を犯さない道を、繰りかえし説いている。

それらは、予後備役将校を本人の希望によつて自由に小学校教員に任用する暴挙に対しても、教育関係者が初等教育
費の国庫支弁を唱えることに對しても、軍備制限の協調が成つて、この國際平和の希望のために余した經費をそのま
ま、国家主義教育に振りむけることを求める賤しさに對しても、「思想国難」のもと国体擁護、国民精神振作の洗札を
受けさせることに對しても……むけられる。

そして、為政者に向ける批判と同時に、「我が国民凡てがいま内にあっても外にあっても帝国主義に対するきびしい反抗的態度に欠くところ」⁽⁹⁾を、かえりみるべきであることを訴えている。「自由、独立、個人的責任は現わされなければならぬ人間の真価」⁽⁵⁾であり、教育の必然の目的もそこにある。そしてそれは高い人格を欠いてはなしえない、というかれのいささかストイックな持論に支えられた教育論をもって、時の教育の本質を問うていたのであった。

- (1) 斎藤茂「国民を過まる中等教育」『山上』一九二〇年四月(『拾遺篇』五九ページ)。
- (2) 同(六一―六二ページ)。
- (3) 同(六二ページ)。
- (4) 斎藤茂「庶民大学を興すの急」『山上』一九二〇年五月(『拾遺篇』六七一―六八ページ)。
- (5) 斎藤茂「カント小考―国家と教育―(一)」『信濃教育』一九二二年一月号(『前篇』六〇―六一ページ)。
- (6) 斎藤茂「帝国主義と国民の文化及び教育」『山上』一九二〇年六月(『拾遺篇』七一―七三ページ)。
- (7) 前掲「カント小考」(六三―六四ページ)。
- (8) 斎藤茂「教育思想における民族的意義」『信濃教育』一九三〇年一月号。こうした一国民にしか通用しない思想をもって武装する危険については、早くからいっている(斎藤茂「大西祝先生を憶う」『日本評論』一九二〇年一月号)。
- (9) 前掲「帝国主義と国民の文化及び教育」(七三ページ)。

結びにかえて

斎藤のさかんな論述の発表は、『信濃教育』をのぞいて、大正時代にはほとんどおわっている。その『信濃教育』へも、一九三二(昭和七)年をもって第二次世界大戦後も時を経た一九六四(昭和三九)年に至るまでの三一年間まったく

中断している。

それらの理由は何だったのだろうか。斎藤自身は、「父が亡くなってから、遊びながら頭が入らなかつた」といっている。たしかに、当時かれは、「父に別れてから私は廢人のように動きがとれなくなつた。父に去られてから私の生活は破滅したごとく覚えて、すべての活機を失つた」。そして、「いたづらな残骸に魔のごとき暗い影をいだいて、おもたい足を曳きずりながら、私は辛くも五十日の歩みを続けて来た。それは瞑目と涙痕の連続であつた」。「私はどうしてこの破れた生活を繕ひ、それを活かして行くであろうか」と記している。それが、父を失つた直後の一時的な感傷ではなくて、八〇余歳の斎藤が思ひおこしうる第一の理由であるとすれば、父の存在が、かれにとっていかに重いものであつたかがうかがうことができる。

あの「くぬぎ林」の懷で育つた斎藤の、自然に対する愛着の感情は、かれの骨肉となつていた。自然を征服することは、結局人間自身の破滅を意味するいかに悪であるかを、いろいろの機会に述べている。一九三二年一二月の最後の文章で、かれはそうした愛着が、「私をして極端な——偏執な、素樸極まる自然児たらしめた。それがために私は始終世間の動きに対して見疾みやくき白眼を送らねばならない運命に落ちた。自然人たることは敗殘人たることである」。こうして「孤独と結ぶ悲哀と憂愁とを味い通した」と、告白するかのようになつて書いている。

斎藤にとつて、政治論は本領ではない。現実の政治について主題的な批評をおこなつたのは『山上』にほとんど限られていふといつていい。そこにみられるデモクラシー擁護は、衆愚におもねるのではなくて、いわば賢人による（しかして民衆は文明人として恥かしからぬ教養をもつた）民主政治というややアリストクラティックな觀念をもつて思考されてきたようである。その法に反した現実に対して、かれはつねに「深く举措を慎」もうとしていた。

「私は今日の政治上の問題について多分に興味を有さないものである。私はいわゆる『實際問題』に迂遠な『理想家』である。私はいわゆる『空想』を實際的なりと確く信じつつ、日々の生活を価値づけるために、かえつて『實際

問題」の非現実味を排斥する者である。私は自己をおのずからの思想の形式の下に活かすことに力めるより外に實際的、現実的に生きる道はないと考えつつ、これに焦慮し、没頭することにおいて、むしろ世の政治家、社会思想家の多くが抱く fine-spun theories を嗤わんとさえする者である。誠意あり、識見ある實際政治家、社会運動家も私にはかえって迂遠なる idealogue と見え doctrinaire と見えることを免れぬのである。⁽⁴⁾

こうした立場が、たとえ偏見によるとしても、これまで、かれはそこに自己の位置を定めてしまっていた。父の死は、あるいはそれを再確認させる契機となったのかも知れない。

信濃教育会は、荒井によれば、「組織の図体を守るために自分の体の中から」、一九二四年川井訓導事件で「土俗性の糸」を切り、一九三三年社会科学研究所グループ弾圧いわゆる教員赤化事件では「洋才性の糸」を切りおとして、「時代の波を乗り切ろうとしていた」のである。⁽⁵⁾かくて、一五年戦争下における『信濃教育』は、必要以上に忠実な国策の推進役をになう。如上の斎藤の性格と、国家主義化していく『信濃教育』とが交叉した時が大正末から昭和初期にあつたのである。

また、生活面では、両親を失い、人手不足の時代にあって一家の柱として二女（長女一九二四年生れ、次女一九二八年生れ）の養育をことしなげなければならない時期にあつたことも、あるいは関係していたと思われる。

村にあって、かれは終始その政治にかかわることはなかった。その任にある人びとに対して「心もちは親しくあるが、事柄はなじめない」⁽⁶⁾こととした。一九六七（昭和四二）年八〇歳にして、『わが日わが道』を、青柳甲子雄に促され、かつそれをもって「旧交をあたため、残部は棺桶に入れてもらうつもり」⁽⁷⁾で、「想い出を古き文殻に拾っておがましくも世におく」⁽⁸⁾ったとき、堀金村教育委員会は、その出版記念祝賀会を主催し、小林章の彫んだ胸像を贈って顕彰した。⁽⁹⁾斎藤にとつて、こうした晴れがましい席は、おそらく二〇歳の出征のとき以来だつたのではないだろうか。かれは自らは意識しないまでも、「人ざらい」という世間の評を甘受し、同時に「人ざらわれ」でもあることを自覚してい

る。⁽¹⁰⁾ そうした老境のアルネは、赤倉に小杉放庵を訪ね、⁽¹¹⁾ 野辺山の石原聖書研究会にひそかに参加し、⁽¹²⁾ かつミレーを偲び、⁽¹³⁾ ソクラテス像を心にきざみあげようとしている。⁽¹⁴⁾

斎藤は、たとえば農村改良などの理論を立て、実践をもってその種の運動としてすすめる人ではなかった。昭和戦時下には、結果的に沈黙しておわつてもいる。内的指向型のアウトサイダーの一人だろう。その意味では、直接的なエフエクトをまったく及ぼさなかった。しかし、かれの行ないえたことは、一農夫として思索し、自分なりに納得して生き、道をあやまらなかつたことである。この精神面における意味は注目しなければならない。かれのそうやって発する光は、強烈ではけつてない。けれども空しいものでもなかつた。本稿の主題は、斎藤の人格形成と、『山上』を中心とする思想について考察することであり、昭和戦時下と晩年のかれについては、別の機会にとりあげたい。しかし、その光は生涯に及ぶものであつたといひよう。

その光源の核に見出しうるものは、おそらく井口喜源治と父秀次郎が植えつけたものであろう。同時にその小さな物質は、結局斎藤自身のものである。決して他をリフレクトしたいわば月光ではない。独自の光を放つたのである。⁽¹⁵⁾ 別の見方をすれば、研成義塾の人びとが共通してもっているものを、くぬぎ林の中で非常に純粹に結晶させたものが斎藤であつた。この「安曇野の野人」のなかに、運命に従つて爽やかに生きた哲人を描いてみるのは、ふさわしいことではな
いだらうか。

(1) 斎藤茂の談話による(一九七二年七月三〇日)。

(2) 前掲「父の顔」(『前篇』一四〇—一四一ページ)。

(3) 斎藤茂「愛日記」『信濃教育』一九三三年二月号(『中篇』二二八—二二九ページ)。なお、この地方のくぬぎ林は、かつて(どの時代を

いうか不明だが)一八〇ヘクタールほどあつたものが、いまは一五ヘクタールくらいしかなく、斎藤がいそしんだ天蚕は絶滅に瀕していると

いう(栗田哲夫「冬の山に芽生える」『日本の屋根』一九七二年二月号)。敗残と無縁だらうか。

- (4) 前掲「父の顔」(一三八ページ)。
- (5) 荒井勉、前掲書、二〇六、二二〇ページ。
- (6) 斎藤茂の談話による(一九七二年七月三〇日)。
- (7) 同(一九六九年八月二日)。
- (8) 『前篇』序。
- (9) 『堀金村公民館報』第四号、一九六七年二月二十八日。
- (10) 斎藤茂「春日抄」『信濃教育』一九六四年四月五月号(『後篇』一〇七ページ)。
- (11) 斎藤茂「小杉放庵をたづねて」『信濃教育』一九六四年九月号。
- (12) 斎藤茂「野辺山の秋」『信濃教育』一九六五年一月号。
- (13) 斎藤茂「アンジェラスの鐘」(『拾遺篇』に所収)。
- (14) 前掲「春日抄」。
- (15) 東京は、「私の感化と恩恵の源泉でもなく、憧憬と希望の対象でもない」。もし「東京の『文化』と全く絶つことが出来たならば、私の生活はいかほど豊富にされ、いかほど自由にされ、いかほど精進の域に進むを得るであろうかをさえ考え」、それを久しく思い念じている(前掲「告天子の里」『前篇』一六一ページ)。この文は示唆的である。

付記——拙稿の作成にあたって、斎藤茂氏、斎藤邦彦氏、等々力古吾郎氏、横内三直氏、臼井素慶次氏から、貴重な御教示、資料の閲読、御便宜などをいただいた。記して厚く感謝の意を表したい。